The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	タイ語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者の断り表現に関する研究
Author(s)	ルンティーラ, ワンウィモン
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58787
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏　　名	ルンティーラ・ワンウィモン
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲 第　５７　号
学位授与年月日	平成１７年９月２８日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	タイ語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者の断り表現に関する研究
論文審査委員	主 査　教 授　鈴 木　　睦
	副 査　教 授　宮 本　マラシー
	副 査　教 授　林 田　理 惠
	副 査　教 授　奥 西　峻 介
	副 査　名誉教授　吉 川　利 治

論文の内容要旨

１．本稿の目的

近年の中間言語研究や学習者のコミュニケーション能力向上のための日本語教育研究の研究対象は、学習言語の音声・形態・統語論レベルの研究から、意味・語用論のレベルにまで広がってきている。その中でも、「断り」表現は相手の意向に逆らうことを伝えることであるため、相手との関係を良好に保つための配慮が必要である。このような丁寧さに関する配慮は、文化・習慣的な要素によって異なるため、外国語学習者と母語話者のような文化的背景の異なる者同士の「断り」場面では摩擦の原因となる可能性の高い重要な問題である。

ルンティーラ(2002, 2004）において、日・タイの間には双方に誤解をされやすい語用論的転移がいくつかあり、特に目上の相手に対する「断り」の状況の場合に大きな差異が見られた。そこで、本稿では、「親しい目上からの提案に対する断り」に限定して、日本語母語話者(NN)、タイ語母語話者(TT)、タイ語を母語とする日本語学習者(TNn, TNs)の三つを比較し分析する。まず、日本語とタイ語の「断り」を比較し、さらに中間言語語用論の立場から日本語学習者の「断り」に現れる母語からの語用論的転移（pragmatic transfer）を分析し、さらに日本語学習者の中間言語に現れる母語からの語用論的転移以外の問題についても考察する。

２．分析の枠組みとデータ

分析の枠組みとしては、Beebe, L. M., Takahashi, T. and Uliss-Weltz, R.（1990）の意味公式を使用し、ロールプレイの文字化資料とフォローアップ・インタビューを資料とした。

調査期間：タイ：2004年2月～3月、日本：2004年4月～5月

調査対象：日本語母語話者：NN（23名）、タイ語母語話者：TT（21名）、タイ語を母語とする日本語学習者（ナレースワン大学TNnとシラパコーン大学TNsの合

計）：TN（35名）

ロールプレイの総数：237

3．分析結果

（1）日・タイ母語話者の断りの全体的な特徴

NNの特徴：NNは、目上の相手への断りに［I.直接的な断り（32.5%）］［II.間接的な断りA.謝罪（13.9%）］［II.間接的な断りC.理由、言い訳（32.5%）］という三つの意味公式を中心に使う。［I.直接的な断り］の使用が多いのは、「自分の専門に関わる親しい目上からの提案」という今回のロールプレイの状況では目上からの提案を重要なことと捉え、はっきりと断る必要があると考えているからである。また、相手がよかれと思って提案してくれたことに従えないことに対して相手への謝罪が必要だと考えている。

TTの特徴：TTは、［II.間接的な断りC.理由、言い訳（45.3%）］が断りに最も重要な意味公式である。［I.直接的な断り］と［II.間接的な断りA.謝罪］は、相手との親しい関係を阻害すると考えている。他に［II.間接的な断りK.言語的な回避（13.1%）］をよく使用する。

（2）日本語学習者の断りの全体的特徴

二つの大学の学習者の分析結果は大きく異なり、単純に母語からの語用論的転移とは言えない部分が多い。TNsは母語からの語用論的転移であると推測される部分が多く、TNnは日本語母語話者の特徴をさらに強調したような意味公式の頻度を示している。

1）［**I.直接的な断り**］：今回の資料では NN（32.5%）＞ TT（15.3%）＞ TNs（10.8%）＞ TNn（2.4%）の順に［I.直接的な断り］が多い。TNs, TNnはどちらもNN, TTよりもさらに［I.直接的な断り］が少ない。これは母語であるタイ語では相手との関係を大切にするために［I.直接的な断り］を避ける特徴があるのに加えて、直接的な断りをしないという日本語の一般的な特徴を過剰に一般化したからであると考えられる。結果として、母語よりも更に［I.直接的な断り］が少なくなっており、特にTNnは2.4%と極端な結果を示している。

2）［**II.間接的な断りA.謝罪**］：今回のデータからも、Promsrimas（2000）の先行研究と同様に「提案に対する断りの場合、タイ語では謝罪が使用されない」という結果が出ている。NN（13.9%）＞ TNs（7.4%）＞ TT（0.4%）という順番はTNsが母語からの語用論的転移（pragmatic transfer）を受けながらもNNに近づいていく過程にあると推測されるが、TNnの［II.間接的な断りA.謝罪（41.5%）］はあきらかに母語からの転移ではない。TNnは「日本語では謝罪をしなければならない」と考えており、日本語の特徴をステレオタイプ化し過剰に反応している。

3）［**II.間接的な断り C.理由、言い訳**］：　［II.間接的な断り　C.理由、言い訳］は、どのグループにとっても断りに欠かせない重要な意味公式である。今回の調査では、TT（45.3%）＞　TNs（43.2%）＞　NN（32.5%）＞　TNn（29.5%）という順番になっている。断りの理由として述べることのできる内容は、NNには制限があるが、TTには特に観察されなかった。

4．日本語教育への示唆

母語と学習者の意味公式の使用頻度を比較した結果明らかになったことは、学習者の中間言語に大きな影響を与えているのは、学習者の母語であるタイ語からの語用論的転移だけではないということである。各大学における日本語教育（Formal Instruction）の方法の違いや日本語母語話者との接触（exposure）の量の違いなど、二つの大学の学習者に固有の要因がそれぞれの中間言語に影響を与えている。例えば、学習者の中間言語には TNn の場合には、「すみません、ちょっと・・・」等、TNsの場合には、「いいですね、でも・・・・」等の語用論レベルのユニット形成が見られる。ユニット形成はそれぞれの学習者が受けた日本語教育の方法の影響が考えられる。

以上のことから、日本語教育への示唆として次のようなことが言える。

1）　日本語や日本の文化について「はっきり言わない」「直接的な断りを避ける」という点だけを指導すると、学習者に日本語に関してステレオタイプができあがる。それを避けるためには、いろいろな状況を設定し断りのバリエーションを教育に組み込む必要がある。

2）　言語行動は学習者の母語や文化と密接な関係があるので、日本語の特徴を指導する時には、学習者の言語・文化との関係を考えて指導しなければならない。タイ語を母語とする日本語学習者のように、本来「直接的な断りを避けて理由だけを述べる」という特徴を持った学習者に「日本語では直接的な断りを避ける」という指導をだけを行うと、極端な回避を招く可能性がある。このような学習者には、逆に日本語において直接的な断りが必要な状況についても指導しなければならない。

論文審査の結果の要旨

本研究は、日本語とは異なる文化的背景を持つ学習者のコミュニケーション能力をいかにして向上させるかという、日本語教育における重要な課題に対する基礎研究であり、タイ語を母語とする日本語学習者の中間言語を語用論的転移を中心として実証的に分析した論文である。筆者は修士論文において、親しい目上の相手に対する言語行動について、日・タイの間に大きな違いがあることを指摘しているが、本研究は修士論文を更に発展させ、親しい目上からなされた「提案」に対する「断り」表現に的を絞って分析を行ったものである。日本語母語話者とタイ語母語話者の違い、およびタイ語を母語とする日本語学習者の二つのグループが見せる中間言語の特徴が、総計７９名を対象とした調査によって明らかにされている。本研究は、まず日・タイの母語話者を比較し、次に二つの日本語学習

者のグループを比較し、最後に学習者が受けた日本語教育(formal instruction)との関係を考察している。

分析の枠組みとしては、 Beebe. L. M., Takahashi, T. and Uliss-Weltz, R. (1990)の意味公式が用いられている。意味公式による分析は、異なる言語間の比較を可能にするという利点を持つ反面、実際にどのような言語形式を用いて発話がなされたのかについて十分な注意が払われないなどの欠点がある。本研究では、意味公式を分析枠組みとして使用する欠点を補うために（1）～（4）のように、量的研究と質的研究を相互に補完させる工夫がなされている。

（1）資料収集については談話完成法ではなく、談話構造に配慮したロールプレイを使用していること

（2）被調査者に対する半構造インタビューを行い、相手に対する配慮がどのような考えに基づいているのかを調査していること

（3）実際に用いられた言語形式に関する分析が行われていること

（4）学習者の受けた日本語教育の影響にも配慮していること

本研究で設定されたロールプレイから得られた結果では、親しい目上の相手からの提案に対する断り表現の特徴として、タイ語母語話者は、1)「直接的な断り」を避ける、2)理由を繰り返して述べる、 3)「謝罪」をしない、という三つが挙げられる。また、タイ語母語話者はインタビューにおいて「直接的な断り」「謝罪」は親しい相手との関係を阻害するものであり、「理由」は詳しく述べれば述べるほど相手によく分かってもらえるものと考えている等、相手に対する配慮をどのように考えているかという興味深い結果が示されている。この「理由」の中には、日本語母語話者なら使用しないと考えられるものも含まれており、「理由」として述べられる内容についても日・タイに違いがあることがわかる。

これに対して、日本語母語話者の場合は、本研究で設定された状況下において「直接的な断り」「謝罪」「理由」の使用が多い。日本語もタイ語も「直接的な断り」は避けられると見られてきたが、本研究の結果では両者には違いがあることになる。この結果がロールプレイに設定された状況の性質によるものであるのか、調査対象が大学生であったためなのか、あるいは他の要因によるものなのかは審査委員の間でも議論になったが、結論は今後の研究を待たなければならない。しかしながら、「重要な提案であるからこそ、はっきり断らなければならない」という日本語母語話者のインタビューへの答えは、示唆に富んでいる。筆者は、「直接的な断り」を避ける、「謝罪する」を多用するという日本語母語話者に関する一般的な特徴は、断りが行われる状況の違いを考慮して再考する余地があることを指摘している。

このような日・タイ両言語の母語話者の違いに対し、二つの大学の日本語学習者はそれぞれどちらの母語話者とも異なった結果を示している。ひとつのグループは、日本語とタイ語の中間的な様相を示し、母語からの語用論的転移による影響が存在すると推測される。しかし、もうひとつのグループは日・タイの母語話者よりもさらに「直接的な断り」が少なく、日本語母語話者よりも「謝罪」を多用している。この結果から、語用論レベルの中間言語は、単純に目標言語と母語の間に位置するのではなく、1）学習者の言語運用能力2）学習の方法3）母語話者との接触量等の複雑な要因に影響されることを示しており、それらの関係を明らかにするためには今回行った横断的研究だけでなく、今後さらに縦断的研究が行われることが期待される。筆者は、もともと「直接的な断り」を避けるという

特徴をもったタイ語を母語とする学習者に対して、日本語では「直接的な断り」を避けるという指導だけを行うことは過剰な回避を招く可能性があると述べている。

本研究は先行研究を慎重に精査し、研究結果を吸収しつつその欠点を指摘し、周到な準備のもとで新たな視点から調査範囲を設定して、日本・タイ両国で調査を実施している。論文はよく整理され、論の展開も手堅く、日・タイの母語話者による違いと二つの学習者グループの違いを的確に捉えている。ただ、欲を言えば正確であろうとするあまり調査結果が繰り返し引用される点が冗長な印象を与える点が惜しまれる。具体的にどのような日本語教育を行うかという点についてのより詳細な提言がなされればさらによかったが、この問題は基礎研究を積み上げながら教育実践を通して試行錯誤していくことによってのみ得られるものであり、筆者の今後の課題となるものであると言えるだろう。

以上、審査の結果、本論文は博士の学位に十分に値する業績であるという点で、審査委員会全員の意見が一致した。タイにおいては、日本語教育を専門分野とする研究者はまだ少なく、ルンティーラ・ワンウィモン氏の今後の活躍が期待される。本論文は日本語で書かれており、筆者の日本語の運用能力の高さが十分に示されていることを最後に付け加えておく。